
告白

hisa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白

【Zマーク】

N7295A

【作者名】

hissa

【あらすじ】

日常の中で見付けられない答えを探す為、見知らぬ土地を目指した彼女。自然と導き出された答えとは・・・

正直、自分に何が出来るとか、何がしたいとか既に分からなくなってしまっていた。

本当は今日だって何時通りに出社し、何時も通りの日々を送っていたはずだった。

何を間違えて今、自分がここにいて無断欠勤なんかしたことのない自分が会社に連絡一つ入れることなく新幹線に乗つて車窓からの景色を眺めているのか。

自分の行動に理解しかねるが、心のままに身を任せのしか出来なかつた。

自分の事なのに可笑しな表現だが。

そう思い本人は自虐的に笑みを浮かべた。

眺める景色はあつという間に流れ去る。ああ、自分の毎日もこんな感じだ。

おぼろげにここ数年間を思い出すが、これといって変哲もない毎日だ。けど、毎日が過ぎ去る速度はこの新幹線の速度と同じ。

今まで自分は自分に何かを残して来たのだろうか。

色んな問い合わせ思いは馳せるが結論なんか出るわけはないのは自分が一番分かっていた。

だから、この新幹線に乗つたのだ。

毎日から逃げ出す為、もしくは新しい何かを見つける為、それとも何かに踏ん切りをつける為、詳しい気持ちの詳細は自分でも分かりかねるが。

毎回どこか遠くへ行きたいと思つていた。

でも、彼女には仕事があるし、帰る家だつてある。そして、どこか遠くへ行きたいと思つても実行するまでの気持ちもなかつた。

結婚したのは、三年前だ。夫とは大学時代からの付き合いで三

年前にプロポーズされ結婚した。付き合い 자체は五年半になる。

付き合つた時だつて、新婚の時だつて幸せを感じていた。

夫は自分の幸せを一番の考えてくれたし、結婚後も仕事を辞めたくないと言つた自分の意見を尊重してくれた。

裕福ではないが、普通の家庭で普通の幸せは自分の手の中にあつた。

こうなるまでは・・・

彼女は声にならない声で呟く。

このまま私が帰らなくて、何日もいなくなつたら夫は心配するのだろうか。

心配しないわけないが、彼女の半壊の心ではそれすらももう分からぬ。

あてもなく飛び乗つた新幹線は東北行きだつた。季節はもう木枯らしが吹く季節だし、都心の気温に慣れてしまつてるので、もしかしたら思いのほか寒いのかも知れない。

それでもなぜか、東北を目指してしまつたのは夫の産まれ育つた土地だからだろうか。

この期に及んで、それでも私は夫に頼つてしまつたのね。

自分を卑下するように彼女は俯いた。

新幹線に飛び乗つてまだ三十分しか立つてない。会社はもうすぐ始まる時間だ。夫も職場に着いている頃だらう。

会社から連絡が来るかもしれない、携帯の電源はあらかじめ切つてある。自宅の電話も留守の設定を解除して来た。

だから、夫は自分がいなくなつたことに気が付くのは夜になつてからだらう。

朝、一緒に食事をし、家を出るまでの自分はなんら毎日と変わらなかつた。でも、この計画は朝、目覚めた瞬間から決まつていたのかもしれない。新幹線に無意識に飛び乗つたが、家の電話などの用意は周到だ。

車窓の景色は、建設物から次第に自然に変わり始めていた。

あてもないので、正直行く所も行きたい所だつてない。でもそんものは、新幹線を降りてから考えればいい。

そんなことを考え、景色を眺めるうちに彼女は浅い眠りに落ちていた。

気が付いた時にはもう最終地點に到着していた。北の地、青森県だ。産まれて初めて訪れる地。

彼女はしつかりと地に足をつけた。

通勤用の鞄を片手に薄いコートの襟を合わせ新幹線から降りホームを歩き出す。

やはり、スーツに薄いコートでは寒かつたなど、もうすぐ訪れる冬の風の冷たさに身を震わせた。

初めて訪れた土地の駅は想像以上に立派だつた。

改札を出て、一旦歩みを止める。さて、どうしたものかしら・・

行き当たりばつたりの旅だ。観光地などの知識も頭には入っていない。

しばらく考えた末、タクシー乗り場へと歩みを進めた。

時刻は正午過ぎだつた。多少の空腹を感じるが後回しでいいとタクシーに乗り込んだ。昼のせいか待たずに乗ることが出来た。

タクシーの運転手にここから一番近い海まで行ってくれと告げ、

彼女はまた外の景色に視線を向けた。

しばらく車内に沈黙が続いた後、年配の運転手が口を開いた。

「お姉さん、こんな寒い季節にそんな薄着で海なんか行つたら風邪引くんじゃないかい」

人の良さそうな、運転手は彼女がこっちの出身じゃないと悟つたのか標準語を使って話しかけてくれた。

彼女は曖昧な顔で運転手に答えた。

「そうですね。こんなに寒いと思つてもみなかつたもので」

彼女が答えると運転手は好感の持てる笑顔でからからと笑つた。

そして、他所から来る人はみな同じ事を言つよと続けた。

「今日は多少風があるからねえ、海の波は高いかもしれないね。あの辺の海はね夏になつても游泳禁止だからね、とても綺麗なままなんだよ」

運転手は満足げに話しだした。

彼女は黙つて運転手の話を聞いた。運転手の身の上話や趣味、家族の話など聞いている間に、景色は町並みから抜けた畠や田んぼ、農家などに移り変わってきた。

「この辺りはね、昔から景色が変わつてないんだよ。夏になるとね、一面稻の穂が青々としていて、そりや、雄大な眺めさ。」

「とても綺麗そうですね。来る季節を間違えたかしらね」

よくしゃべる運転手になぜか彼女も冗談交じりで答えていた。いつもだつたら、こんな他愛のない話を出来る程タクシーにも長時間乗らないからな、とふと思つ。都心は駅の間隔も狭いし、遠くへ行かなくても用は近場でほとんどが済ませる。久しぶりに、新鮮な感じがした。

「今季節でも悪かないさ。山の方へ行けば紅葉がとても綺麗だし「子供が育つにはとてもいい環境ですね。私は産まれも育ちも都内だつたから、こうゆう大自然の中で大人になるのは憧れる」

そう言つて、ふと彼女は夫の事を思い出した。

そういえば、よく子供の頃の話を聞いたものだ。昔を語る夫の横顔に、自分では経験した事のない遊びや未知な経験談がいっぱいで羨ましくなつた事がある。

そんな事をふと思いつぱいに憂鬱が広がつた。そんな気分を振り払うかのように彼女は運転手との会話に集中しようとした。

他愛のない話をしているうちに、彼女の乗つたタクシーはもう海の側まで来ていた。次第に、防波堤の向こうに青く濃い海が見えてくる。

海なんて来るのは何年ぶりかしら。

記憶の糸を手繰り寄せたが、ここ数年は仕事に家庭にと、自分の時間を持つた事がなかつたのでやはり海に来た記憶は遠い昔の出来事だ。

海岸沿いを走る運転手に、どこか見晴らしのいい所で降りしてくれと告げる。

「あいよ」
運転手は何も言わず、

「あいよ」
とだけ一言、言つた。

さあ、今日こゝでは一日使って色々考えなれば・・・

今まで日常の中では、とても重過ぎて一人では考えられなかつた事。一人で誰も知る人のいない地でゆっくりと考えれば、自分の中に結論が出せると思った。いや、正直時間はあまりない。だからこそ、この方法を無意識ながらに考えたのではないか。無意識の中の故意だったのかもしれない。ただ、今の彼女にはそれはどちらでもいいことだつた。

しばらく行くと運転手は、海岸沿いの高台になつてゐる道で車を止めた。そこは、背丈の短い草が茂つた野原が続きその先は急な崖になつてゐる。野原と言つても季節は悲しい冬の前なので、草の色はもう悲しい色合いだ。

「お姉さん。ここはこの海一番の景色だがここで降りて帰つはどうするつもりだい？」

怪訝そうにそして、少し心配そうに顔を覗き込んだ運転手に
「何とかします。ただ、海が見たかつたもので。帰りも通りがかつたタクシーでも拾いますのでご心配いりませんよ」
と運転手の親切に彼女は心からの笑顔で答えた。

そして、運賃を手早く支払い、それでも心配そうな視線を向けてくる運転手に彼女はお礼をすましタクシーを降りた。

タクシーを降りると冷たい海風が身に凍みた。身を縮ませる彼女を尻目に、タクシーは去つていった。

海風の進入を防ぐように、コートの襟を合わせ一歩ずつ前に歩みを進める。視界は次第に、崖の淵から広がる、広大な海を見つけた。崖の淵に落下防止の柵があり、彼女はそこに手をやり、海を見下ろした。

私、本当に来たんだわ。

青々と高波が、打ち寄せては岸壁に砕け散る。弾ける水しぶきを目で追う。しばらくその繰り返しの海を見つめていた。

視線を上げれば空との境界線の地平線が見える。一人で、遠くの地の海を眺めるなんて、昔の自分は想像もしなかった。一体、どうしてこんな事になつたんだっけ。

彼女は過去を振返つた。過去といつてもそんな遠い事ではないし、記憶に真新しい。が、その事をいつも気にかけていた彼女には何年も経つている様な錯覚にさえ陥る。

海の色よりも深いため息をつき彼女は片手を自分の腹部にあてた。そして冷静に過去を回想し始める。

出会いは「よく普通で、これといつて強い思い入れもない。彼は同じ職場の上司だったし、お互い仕事仲間としての意識しかなかつた。彼女は上司をとても信頼していたし、その上司も彼女の仕事を信頼していた。

特に変哲もない関係だ。

年は大して離れてはいなかつたがお互い家庭があつたし、帰りに一緒に飲みに行く事などもなかつた。特別な感情を抱くことなく、この数年は過ぎ去つていた。

じゃあ、どこからこの関係に終止符は打たれたのか。

彼女はまた、思考の世界に入る。

波は、変わらず激しく打ち付ける。きらきらと蜃の日差しに飛沫が揺れる。

丁度、半年位前の天気のいい午後だった。クライアントに会いに一人で出向いた帰り、出先で食事をした。また午後からは別の取引

先に出向いて行かなければいけなかつたので二人は手近な喫茶店に入り簡単な昼食を摂つた。

その時だ。彼から事実を聞いたのは。

先日、妻と別れたんだ。

その時自分はどんな反応を示したか。驚いたつて？沈黙した？いや、以外に冷静に聞いていた気がする。それから、彼とよく食事に行くようになった。誘われれば断ることもなかつたし、何より一緒に過ごす時間は楽しかつた。だからと言って、不倫するつもりなど毛頭なかつたし、夫への愛情だつて変わらなかつた。

じゃあ、一体なぜ？

彼女は曖昧な笑みを浮かべた。

そう、別に理由なんかなかつた。

ただ、時間のようにお互い流されたのだ。

一旦、流されてしまえば後は簡単だ。流れ流され、深みにはまって行く。

何度も罪を重ねたかはもう覚えていない。

確実に言えるのは夫にはばれていないということ。じゃあ、こんな事にならなければ、一生こんな関係を続けたのか。正直この答えは出そうにない。同じくらい好きなのか？そんな事はないと思う。でもどちらにしろこの関係は終止符を打たなければいけないのだ。ただ、どちらと終えることになるのか・・・

これがまた重い悩みの種だ。

私もこの波のように散つてまた、波に帰れたらいいのに。

そんな都合のいい話もないのは百も承知だが、そう願わざにはいられない。

現状維持なんか出来ないのは自分が一番身にしみてている。時間はないのだ。ただ、自分がこうしたいと願つた所で容易にそれは認められないだろう。そんな事も百も承知だ。では、夫と別れるのか。

そんな事は望んではない。今も変わらず愛している。じゃあ、彼と別れるのが一番自然ではないか。誰もがそう言つだらう。そこで彼女は思考を止めた。

彼とはどうしたいのか。

そこだけが思考が働くかないのだ。遙かな地平線を眺め、初めてその事に気づく。だからいつも考え方堂々巡りになつてしまつんだ。そんな自分にため息が自然と出てしまつ。別れれば仕事は気まずくなつてしまつのはもちろんだし、でも問題はそんな簡単な事ではないのだ。

自分は結婚しているし別に無理に働く必要もない。自分のわがままで働くせてもらつてはいるだけな分けだから仕事を辞めても夫はなにも言わないだらう。

だからと言つて、夫がこんな自分とこの先ずっと一緒にいてくれるのかは分からぬ。

結局は一人になるのかもしれないな。そしたら仕事は辞めるわけにはいかない。

やつぱり、答えなど出ないのかしら・・・

軽くため息をつき、彼女は思考を現在に戻した。

時間がどの位経つたのか分からぬが、潮が引いてきたのか遠くに見える浜には子供たちが浅瀬に足を入れ遊んでいるのが見える。その後ろで子供たちの母親が慈しむ様に子供たちを眺めている。

ああ、私はああいう時間が欲しかつた。

子供達の明るい笑い声。愛しそうに見守る母親。

緩やかに流れる親子の間の時間が羨ましい。とても微笑ましい光景であり、今の自分にはいざれそんな時間が持てるという自信がない。

でもああいう時間が自分たちの中に流れるよう努力はするつもりではいるけれど。

なにをするにも物事は簡単にはいかないといつ事は、痛いほど身に染みている。

「投げ出すわけには行かない」

そんな暖かい光景の中、諦め切れないものがある。

やはり、夫にも彼にも事実を話すのが一番早い。

この今まで居られる訳がないなら、覚悟を決めてきちんと話すしかない。

彼女は波と親子を交互に見、小さく唇を噛んだ。今は辛いが、いつかあの親子の様な時間を自分が見つけられるように。今、すべてをあやふやにしたままでは何もこの先得られはしないだろうし、何時までも自責の念を抱えて生きて行くなんて辛すぎる。

自分がした事が許されるなんて思っていないし、きっとまた躊躇たらこの海に来ればいいんだ。きっと、何かの道標に遇えるような気がする。

あの親子の優しい時間を間の辺りにさせてくれた様に。

そう思うと彼女はここに来て初めて緊張を解いた笑みを見せた。

それは打ち寄せる波、すべてを受け入れてくれる広大な海、あの理想の親子、こらからの自分に感謝の意を込めて。

どうにもならないなら、先に進むしかないのだ。どうせ先に進むなら後悔を抱いて先に進むより、辛くても希望を信じて先に進むほうがどれだけ楽か。

どうしてこんな事も気づけなくなっていたのだろうと、自分が可笑しくなり彼女は笑えて来た。

日常では、自分の世界が小さくなり過ぎていたのだろうなど。

今だから、理解出来る。人は悩み抜いた分だけ先に進めるのかもしれない。

彼女は心に一つの告白と、一つの決心をした。この景色を見ていたら何だって出来る気がする。いつだって、人はこの雄大な自然に生きされているのだから。

晴れ晴れした気持ちで帰ろう。

彼女は心の奥底からそう思えた。

「私は、一人じゃない」

そう。帰つたら夫に告げよう。そして彼にも告げよう。
私、子供を産むわ。と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7295a/>

告白

2010年11月23日17時23分発行